

## 認知症、認知機能低下のある患者に対する作業療法の取り組みの現状と課題 ～一般病院における実践～

○山地早紀 納田一 松木美津子 菰渕莉佳子 辛島友希

キナシ大林病院 リハビリテーション科

Key Word : 認知症, 質的研究, 作業遂行

**【目的】**近年、認知症患者数の増加に伴い、既に入院患者の2割に認知症または認知機能の低下があることが報告されている。一般病院でも、主疾患の対応と同時に認知症への対応が求められている。本研究では、当院にて認知症、認知機能低下のある患者に対してどのような作業療法を行っているのか、取り組みに対してどのような問題点があるのか、またそれぞれの事項の関係性について明らかにすることを目的とする。

**【方法】**当院の作業療法士4名に対してフォーカスクループインタビューを用いてデータ収集を行った。インタビューでは、実際に担当した認知症患者あるいは認知機能低下のある患者に対してどのような作業療法を行ったのか、実践するなかでどのような配慮をし、どのような環境面への調整を行ったのか、どのようなことが困難であったか、という項目を挙げた。インタビューは30分程度を2回実施し、録音しデータ収集を行った。分析は、逐語録を作成し、データの読み込みを行い、プロパティとディメンションの抽出を送り返し行った。カテゴリー間の関係性について、対象者に正当性の確認を行った。

**【説明と同意】**参加者には、研究の目的・意義を説明し、研究参加に関する同意を書面にて得ている。

**【結果】**対象者は、作業療法士4名（男性1名、女性3名）、経験年数は3年～16年であった。データ分析により、【その人らしさを尊重したかかわり】【作業療法士の技能を活かした介入の工夫】【作業による離床や意欲の促進】【入院生活の環境による制限】【目標の設定や介入の効果が分かりにくい】【介入内容の優先順位をつけるのが難しい】の6つのカテゴリーが出現した。病院という限られた環境の中で、その人らしさ尊重したかかわりや作業の特性を活かした介入により離床や意欲の促進に繋がっていること、同時に作業療法士が抱えていた困難感や葛藤が明らかになった。

**【考察】**日本作業療法士協会の発行する認知症に関する作業療法のガイドラインでも言われている離床や意欲の促進につながる、【その人らしさを尊重したかかわり】【作業療法士の技能を活かした介入の工夫】が当院でも行えており、一定の作業療法の介入による変化があると考える。【入院生活による制限】よりコロニーによる影響はとても大きい。面会制限による身体拘束の実施率の増加も先行研究では言われている。そして、【目標の設定や介入の効果が分かりにくい】【介入内容の優先順位をつけるのが難しい】という具体的な課題が明らかになった。客観的な評価法についての学習や使用を行うこと、他職種の理解や協力を得ながら介入の調整を行うことが必要であると考える。